

●本号の内容

『賃金破壊』の書評や紹介記事が各紙に続々登場している。「関西生コン事件」という重大な事件がおきていることをより多くの人々が知るきっかけとなるだろう。

斎藤貴男さんの書評（下左）は1月8日東京新聞。下右の佐高信さんの紹介記事は本日発売の日刊ゲンダイ。

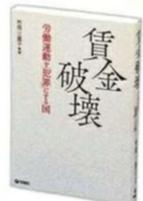
また、デモクラシータイムスは、池田香代子さん（翻訳家。『世界がもし100人の村だったら』など著作多数）と竹信三恵子さんの対談を YouTube で公開。視聴回数は本日現在で1万3千回となっている。（「デモクラシータイムス 組合つぶしと低賃金の日本」で検索）

グローバル化が加速した一九九七年以降の四半世紀を通じて、賃金が下がり続けている先進国は日本だけだ。米英仏独伊のいずれも、20〜30%は上がっているのに。異次元も窺った賃金デフレ。見せかけだけの「アベノミクス」の主が表舞台を去り、ようやく知れ渡った日本経済の実態を読み解くカギのひとつが、本書にはある。練達の労働ジャーナリストが、「関西生コン事件」の深層を活写した。生コンクリート輸送の運転手を組織した「全日本建設運輸連帯労働組合」の関西支部を標的とする、国策としての労組潰しだった。

国策としての労組潰しの深層

凶悪犯並みに住所まで晒す報道。検察の求刑は殺人罪を連想させるほど重かった。関生支部のような産業別組合には、企業別組合とは異なる戦術がある。国際的にはそれが普通だし、ほとんどが企業別組合の日本でも、もちろん法的に認められた活動だ。それでも弾圧された理由。本書によれば、当局は彼らの正当な組合活動を「カネ目当て」の「嫌がらせ」で「脅し」不当な圧力などと言いつけることで、暴力団などの組織犯罪と同等に扱ったという。

このままなら、賃金デフレは一層の深みに陥り、日本の何もかもがジリ貧になっていく。だが著者は希望を捨てない。リストの一行に感し入る。評 斎藤 貴男 (ジャーナリスト)



(旬報社・1650円)

賃金破壊 労働運動を「犯罪」にする国

竹信 三恵子 著

(5) 第3種郵便物認可 2022年(令和4年)1月17日

選者 佐高信



中国文学者で論評の記者でもある竹内好の故郷、長野県佐久市で竹内についての講演をして以来、竹内の本を続々と読んでいます。1983年3月31日の日記に竹内はこう書いていて、改めてこの本のことを思った。「きょうは私鉄の時間スト」

賃金破壊

竹信 三恵子著/旬報社

今年も新聞の予測は大きく狂った。取材能力が落ちているのか、それとも内面指導があるのか。たぶん両方だろう。先日の時間ストのときは、予報がまったくはずれたばかりでなく、翌日の紙面でもスト反対の世論をネツ造っていた。

まず連合会長が知るべき「労働組合とは何か」

新聞はますます未明症状になり、それを救う判断はないという。一年前の私の判断は狂わなかったように思う。それからおよそ60年経った。取材能力が落ちているのか、それとも内面指導があるのか、目を覆うほど劣化したのは労働組合だろう。いま、24時間ストなど考えられない。ストはそれが、組合そのものが反社会的存在視されているからである。この本の副題が「労働運動を「犯罪」にする国」。私は連合がそれによって生かされていると言わざるを得ない。個人加納という名目があつて、連合会長が関西生コンは、中小零細生共産ダメと、そんな話を



労働運動を<犯罪>にする国 竹信三恵子さん 組合つぶしと低賃金の日本 竹信三恵子さん 池田香代子の世界を変える100人の働き人60人目 2022.1.11.